IS 一騎士と魔王一

村正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS―騎士と魔王―

【Nコード】

N7520X

【作者名】

村正

【あらすじ】

女にしか使うことの出来ないISを動かしてしまった、織斑―夏と双子の弟の一樹イツキの織斑兄弟。世界初の男性操縦者となり、IS学園に入学することになった織斑兄弟に待っているものは……。

プロローグ（前書き）

今更ですが書きたい衝動にかられ、書き始めました。
何とぞよろしくお願いします。

プロローグ

「おい、一夏」

俺は今、目の前にいる兄を全力で睨んでいる最中だ。そうでもしておかないと俺の気が済まない。

本当はボコボコにしてやりたい。

「……………」

「おい、一夏。聞いてんのか？」

当の一夏は、俺の方を振り向こうとはしない。

俺と目を合わせたら負けとか思ってたんじゃないやねえだろうな。

「だ、大丈夫だ。俺に任せろ！」

「何が任せろだ！ テメエに任せたら、こっやって現在進行中で迷ってたんだろうが！」

俺と一夏は私立藍越学園の受験のため多目的ホールに来てるんだが、さつきも行った通り絶賛迷っている。

まあ、初めて来たから道が分からないというのは当たり前だけど、こっも綺麗に迷うとはな。

人に聞こうにも、辺りには誰もいねえし。どうしたもんか。

「えーと……………あれ？ これ、こっやって二階に行くんだ？」

「ちよつと待て！ 今、聞き捨てならないこと聞いたぞ！ 今のは完全に迷っている、って認めたようなもんだろ！」

ツッコミを入れても、一夏の野郎はスルー！

はっ倒してもいいよな。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

「は？」

とうとう血迷ったらしい。完全にパニックってやがる。

このままだと俺達は受験できなくて、藍越学園には不合格ってことになりそうだ。

そうなった時、こいつを慰めるのは骨が折れそうだ気がする。

「……んなわけあるか。それで当たりだったら、テメエのことを心の底から尊敬してやる」

「よし、言ったな。約束だぞ」

「おう、約束だ」

そんなことを話して歩いているとドアを発見。

さっきの宣言通り一夏は、本当にそのドアを開けた。

あんなことになるんだったら、この時意地でもこのバカを止めときゃよかった。いや、マジで。

ま、後付けでしかねえんだがよ。

「こんな感じかなあ？」

タイピングを止めてディスプレイを眺めながら、私は首を傾げる。

配分は問題ないと思うんだけど……どうなんだろう。
何か違和感がある気がしてならない。

特にこのシステムが。

やっぱり、これを入れたのが間違いだったかな？ でもこれを搭載して、初めて動く機体だし。

「うーん……この子は自分で完成させたかったんだけど、しょうがないか。お兄ちゃんに聞いてみようって」

そう思って部屋から出た時だった。

お兄ちゃんの部屋から、大きな物音が聞こえてきた。

「お兄ちゃん!？」

「おお！ 紬ちゃん、ナイスタイミングだね！ これこれ！ 束ちやんから聞いて、ボクでもビックリだよ！」

どうしたんだろ？ そう思って、お兄ちゃんの見えたディスプレイを覗いた。

そこに映っていたのは、幼なじみの似ていない双子だった。

「一夏くんも一樹くんもすごいね。流石は千冬ちゃんの弟、ってことなのかな？ 紬ちゃんも、そう思うよね？」

私は固まったまま動けなかった。

世界で初『IS』を動かしたとして幼なじみが、織斑一夏と弟の一樹が映っていたのだから。

「紬ちゃん、大丈夫？」

「え、あ、うん。大丈夫だよ」

完全に思考が止まってた。ホントこの家族は、いろいろとトンでもないなあ。

「それにしてもよかったね」

「何が？」

お兄ちゃんの言ってることが、一切わからない。

「また一樹さんと一緒の学校に通えるねえ」

「え？」

この時の私には、お兄ちゃんの言っていることが全く分からなかった。

だって来年度から私が通うことになるのは女子しかない、IS学園なんだから。

第一話

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前で微笑む女性。

教室に入ってきた時は、間違っで私服で登校してきた生徒かと思っただ。

いや、マジで。

そしたら副担任だと聞いて、軽く驚いた。

人は見かけによらないとは、正にこのことだな。

まあ、んなことはどうでもいいんだよ。俺が文句言いたいのは、今のこの状況。

俺と一夏以外、女子だけって教室。

あの受験日に一夏の野郎が開けたドアの中で、俺達は『IS』を動かしてしまった。女しか動かすことができないはずのそれを。だから俺達はここに、IS学園に入学することになった。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

完全に一杯一杯だな。まあ、この状況は精神的にくる。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、起こってる? 起こってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

何で年下相手に、こんなに下手に出られるんだ? 俺なら立たせ

て、自己紹介させるぞ。

一夏もさつさと立って、自己紹介すりゃあいいのに。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願いします」

一夏の自己紹介はそこで終わり。クラス中から視線が集まる。『もつと何か言え』と。

そりゃそうだろ。二人しかいない男の内の一人の自己紹介だ。いろいろ聞きたいのは当たり前。

そんなことを考えてると視線が。

一夏だ。

『助けてくれ』とアイコンタクト。それに対して俺は『テメエで考えろ』と返信。

お前のことまで知らねえよ。

すると一夏は幼なじみの篠ノ之箒と、天草紬に視線を向ける。姉の箒は外に顔を逸らし、紬は笑顔を返してくれるだけ。ありゃ、意味を理解してないな。

一夏の味方はいなくなつた。どうするんだ？

「以上です」

クラス中ですつこける音が。当たり前だな。

確か中学の時もこんなじゃなかったか。進歩無し。

まあ、俺も人のことは言えそうにない。だって思いつかねえんだからよ。

パァンッ！ 一夏がいきなり叩かれた。

「いつー！ー！？」

あの完璧な叩き方。何か見覚えがある。つか、身に覚えがある。

今までも何度も喰らってるような……。

「……」

振り向いて見ると黒のスーツで身を包んだ、久しぶりに見る人物が。

「げえっ、関羽!？」

パンツ!

いや、違うだろ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

関羽じゃない。鬼神だ。

パンツ!

「イテエ!」

「無礼なこと考えるからだ」

何で分かったんだ?

謎だ。謎すぎる。というか、何で姉さんがここにいるんだ? 職業不詳で月一、二回しか帰ってこない姉さんが。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

何だ今の声? 千冬姉のあんな優しい声を、俺も一夏も聞いたことがない。

あの人からあんな声が出るのか。ビックリだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞けないいな」

無茶苦茶な。

誰もが引いてるかと思ったら、黄色い声援が響いた。

「キヤーーーーーー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

耳が潰れる……本当に人間の声援か？

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

この言葉、本気で言ってる。実弟の俺が言うんだから間違いない。

少しくらい喜べよ、姉さん。

そんなことは絶対に無さそうだけど。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡して〜！」

このわずかな時間で分かったこと。それは、このクラスにはMが多いつつと。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」
「いや、千冬姉、俺は……」

「パンツ！ 一夏の脳細胞は、今日一日でどれだけ死ぬんだろうか？」

ちなみに今で一万五千個。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

このやり取りがちとまずかった。つまり姉弟なのがバレた。

「え……？ 織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男で『IS』が使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

最後のはスルーだな。

「織斑弟、次はお前だ。さっさと自己紹介しろ」

「はいはい」

「はいは一度でいい」

今だ！

タイミングよく避けたら出席簿は空振り。

ゴンッ！

代わりに拳が降ってきた。

容赦ねえの。

「つー……あー、織斑一樹。そこにいる一夏の双子の弟だ。似てねえのは二卵性だからだな。まあ、一年間よろしく頼むわ」

一夏の時みたいになるかと思ったけど、ここで運は俺に味方した。何かというとチャイムがなった。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

また無茶苦茶だ。すつげえ暴君。

一夏、関羽は間違い。こりゃ曹操だ。
パアンツ！

「痛いっ」

「余計なことを考えるからだ」

これで俺の脳細胞も一万五千個死んだ。姉さんは俺達をバカにしたいんじゃないのか？

そんなことを思う俺だった。

「あー……」

一時間目が終わり、一夏の野郎は唸っていた。

理由は聞かなくてもわかる。この雰囲気だダメなんだろう。

俺達を見るために教室の外には他のクラス生徒に、一、二年が詰めかけてる。

何で俺達が、本に初めて来たパンダみたいな状況になっているのかというとISが原因だ。

このIS学園は俺達が入ってくるまでは、世界中の箱入り娘だったりお嬢様ばかりの女子率100%の学校。

しかも世の中はISで『女』偉い』なんて、バカらしい構図が浸透。女尊男卑なんて社会が完成。

そんな中に対等な立場の『男』が現れてみる。興味が湧かないわけがないだろ。

しかもだ。元日本代表で全国の女子の憧れ、織斑千冬の弟というプロフィールまでつくつくと、そりゃややこしくもなる。

俺はあまり気にしないようにしてるが、さすがになあと思うことはある。

「……ちよつといいか？」

「え？」

「んあ？」

気づけば俺達、正確には一夏の前に六年ぶりの再会になる筈がいた。

そして俺の目の前には紬が。こいつとは一年ぶりか。

筈の方は一夏だな。

それは隣のバカもさすがに分かったらしく、

「廊下でいいか？」

筈と共に教室から出ていった。

さて残ったのは俺と紬。

「久しぶりだね、一樹」

「久しぶりだな」

周りから出遅れた、なんて空気が流れるがそりゃ当たり前前だな。

こいつとは幼なじみなんだから。

「変わらねえのな、お前」

「そうかな？」

「ああ全然だ。というか、この一年何してたんだ？」

「お兄ちゃんの所でテストパイロットをやってたんの」

「ISのか？」

「うん。で、この子がその時お兄ちゃんに作ってたんだもらったんだよ」

と言って紬が指差したのは、ヘアゴムの飾り。

「この子？」

「これね、私の専用機なんだ」

「……………マジで」

「うん、マジで」

こいつの兄、天草曆さんならそれくらい出来そうだな。

箒の姉の束さんほどじゃないが、かなり頭がいい。束さんが世界一位なら、曆さんは世界二位だ。

「だから私はお兄ちゃんが社長の天草重工の所属、ってことになってるんだよ」

「そうか」

まあそうなるか。

天草重工っていうのは、日本に住んでる奴なら誰でも知ってる大手企業。

ISを扱うようになったのは4、5年前だったと思う。

つまり曆さんはこの短期間でISを完成させ、紬の専用機まで作

り上げたということ。IS初心者の俺でもすごいと言っことは分かる。

「また今度、この子を見せてあげるね」

「なら楽しみにしとく」

キーンコーンカーンコーン。

ちようどよくチャイムが鳴り、筭と一夏も帰ってきた。

「それじゃまたね」

「ああ」

パァンッ！

「とつとと席に着け、織斑兄」

「……ご指導ありがとうございます」

半日で二万个。

ハイペースすぎる。

今日一日で一夏の脳細胞は何個死ぬんだろうな。
今度紬と賭けてみるか。

第二話

「……であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要があり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ……」

フム、分らん。

一応教科書を眺めたけど、一気に睡魔が襲ってきた。つまり、今は眠たくてしょうがない。

んなことより、この状況をどうするかだ。他の女子は分かっているのかな。

さて、一夏は……同じ状況か。よし仲間だ！

「一夏くん、一樹くん、何かわからないところがありますか？」

出来れば空気を読んでほしかった。何でこの人はこのタイミングで訊いてくる？

「あ、えつと……」

いや教科書もう一回見たって、わからない物はわからないんだ。意味がないだろ。

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

それを聞いたこいつは何を思ったんだろうな、

「先生！」

「はい、一夏くん！」

「ほとんど全部わかりません」

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

一瞬で先生の顔が引きつった。あー、これは先生も予想斜め上だつたらしい。

……よし、追い込んでみよう。

「先生」

「はい、一樹くん」

「俺も全部わかんねえっす」

さらに引きつった。

ヤバい。この人楽しい。

「え、えつと……二人以外で今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

その質問は意味ないだろう、先生。女子は入学前から勉強してるんだからよ。

シーン……。

ほら、誰も手を挙げない。

「……お前たち、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「一度読んで眠くなって、それ以来呼んでない」

パンツ！

ゴツ！

俺だけ拳っておかしくね？

「必読と書いてあったらだろつが馬鹿者共。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「無理だろ……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」「」

これ以上逆らったら殺されてたんじゃねえかな？ それくらいの威圧感が今の瞳にこもってた。

しょうがない。まともに授業を聞いて、ちゃんと覚えるか。これ以上殴られるのは避けたいし。

授業が終わり、今は休み時間。俺も一夏も疲れ切っていた。主に精神的に。

「どうする、一樹？」

「まあ一週間じゃ、かなり厳しいだろうな」

「だよなあ」

さつき一夏も言ってたが、あれの暑さは電話帳レベル。一週間で読破し、内容を覚えるなんて拷問でしかねえ。

「ま、箒か紬にでも……」

「ちよつとよろしくて？」

「よくない、帰れ。だから、箒か紬に聞いたらいいんじゃないか？」

「一樹。さすがにそれは……」

一夏に言われそつちを見れば、知らない金髪がいた。

何だ？

「何ですか、あなたは！？ わたくしが話しかけていますのよ！

それ相応の態度がありますでしよう!」

「いや。テメエのことなんざ、これっぽっちも知らねえから」

まったく言っていないほど興味がなから、自己紹介の時も名前を記憶していない。

「わたくしを知らない? このセシリア・オルコットを? イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!」

うるせえ。

黙らせていいか? そんなことを、アイコンタクトで一夏に聞いたが、

「し、質問いいか?」

「ちっ……」

一夏の野郎。無視しやがって。

「代表候補生って、何?」

この質問には、俺も驚いた。

さすがにこれは俺でも分かったのに。叩かれすぎてとうとうダメになったか?

「お前、日本語を最初から学びなおしてこい」

「え、ど、どういうことだ?」

まだ分かってないらしい。今度、これの脳を解剖してみたい。世紀の大発見ができるかもしれない。

「代表候補生というのは国家代表のIS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ」

「あ、ああ!」

「それでその自称エリートが、一体何のようだ？」

「本来なら私のようなエリートとは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのですわよ!」

「「そうか。それはラッキーだ」」

「……バカにしていますの？」

こいつは分らんが、俺はバカにしてる。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

……これが優しさねえ。初知りだ。

新しいことを教えてくれたこいつに、少しは感謝しよう。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「なあ一真。入試って、あれか？ あのISを動かして戦う奴」

「それだろ。つか、それしかねえだろうよ。確か、お前勝ってたよな？」

「一応。というか、あれって勝ったのか？」

そう聞いてくるのもわかる。あの時、相手だった先生は一夏に突っ込んでいきそれわかわれ、壁に激突し気絶。

それで判定は一夏の勝ちになった。

ちなみに俺は負けた。あっさりとな。

「多分……な」

今の会話がこの女にとつちや、かなり衝撃的だったらしい。
お前のせいで唾然としてるじゃないか。

「わたくしだけでは無いんですの!?!」

「女子ではってオチじゃないのか?」

一夏の一言で、何か変な音が聞こえてきた。
それもこの女から。

「まあ、落ち着け。んなこと、どこかで起きるだろ」

「こ、これが落ち着いていられー」

キーンコーンカーンコーン。

やっとこの女の話も終わりが。

「っ……! またあとで来ますわ! 逃げないことね! よくって
!?!」

よくねえよ。

どうしてあそこまで上から物が言えるんだ?

ま、いいか。次の時は紬の所に行こう。

で、勉強を教えてもらう約束をするか。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明
する」

今度は姉さんの授業か。装備の特性ね。聞いて損はねえ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦にでる代表者を決めないといけないな」

代表者。すっげえめんどくさそうな役職だな。

「クラスの代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で対した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ほらめんどくさい。

しかもだ。すごくいやな予感がする。今すぐここから逃げようか。……無理だろうな。姉さんがいるし。

「はいっ。一夏君を推薦します！」

「私もそれがいいと思いますー」

「じゃあ私は一樹を！」

今の声は間違いなく細だった。そっちを見れば、細が俺を見て笑っていやがる。

「同じく私も一樹君に一票」

「では候補者は織斑兄弟……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！ 俺はそんなのやらない！」

「俺もダリイからパーパー」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでもパーパー」

「納得行きませんわ！」

この甲高い声はまたあの女か。今度は何だ？

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？」

恥さらしか。あれだけの大声は恥ずかしくないのか？
すごいな。

「實力から行けばわたくしがクラス代表になるのはひつぜん。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」

人間って元を辿れば、全員猿なんだが。ま、んなことはどうでもいいか。

つかこの女、俺たちに文句言ってたんだろ。対象が日本になってるぞ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でー」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料金で何年覇者だよ」

「キャンキャンうるせえよ。黙らねえとその口、石突っ込んで塞ぐぞ」

ほぼ同時に俺と一夏はキレた。

というか、イギリスの飯ってそんなにまずいのか？ 今度食ってみるか。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
「先に日本を侮辱したのはテメエじゃねえのか？ 自分がついさつき言ったこと、もう忘れたか？ おい一夏。イギリスの代表候補生の頭は空らしいぞ」

一応自分の住んでる国だからな、あそこまで言われてムカつかないわけがない。

「決闘ですわ！」

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「そうだな。わかりやすくして、俺も大賛成だ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使いーいえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。俺も一樹も真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

行ってくれるね、一夏。俺、お前のそういうこと大好きだぜ。

「そう？ 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

ん？ 一夏の奴、何考えてんだ？

……まさかなあ。こいつの性格だとありえそうだ。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

このセリフを聞いた瞬間、一夏の頭ぶん殴っていた。割と本気で。クラスの女子共も爆笑してやがる。

「何するんだよ！」

「お前はバカか！？ バカなのか！？ 俺達はISで戦うんだぞ！
代表候補生にハンデやってどうする！」

「あっ……………」

たくっ……………どうしてここまで抜けてんだ？

つか、こいつらいつまで笑ってたんだ？

「……………じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを
付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだ
なんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

あいつの顔には明らかな嘲笑が。目の前で兄貴がバカにされるの
が、ここまでムカつくとはな。

「ジョークねえ……………じゃあ、これもそう聞こえるのか？」

「何がです？」

俺は笑顔で、

「強い物イジメ」

直後、クラスはさっき以上の笑いに包まれた。

笑ってる笑ってる。笑ってられなくなるからよ。

「女。俺達が負けたらてめえの奴隷なんだよな？」

「もちろんですわ」

「なら俺達が勝ったら奴隷じゃなく土下座しろ」

「なっ！」

「まさか、そんなことも出来ないのに奴隷なんて破格な条件を出したのか？」

「ぐっーーーーー！」

さてどう出る？

まあ出来なくても、こいつに屈辱を与える方法はあるからな。こ
ういうのは、一回くらい折れた方がいい。

俺にもそれくらいわかる。

「わかりました！ 土下座でもなんでもしてさしあげますわ！」

この時さつき以上の笑顔になっているのを、俺は自分で感じてい
た。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課
後、第三アリーナで行う。織斑兄弟とオルコットはそれぞれ用意を
しておくように。それでは授業を始める」

一週間。

上等じゃねえか。それだけあつたらなんとかなる。

授業が終わったら千歳に頼むか。

第三話

放課後、俺と一夏はまだ教室にいた。

「うつうつ……い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

眠い……あの教科書見てるだけで強烈な睡魔が襲ってくる。どうやったら眠くならないんだろつな。

「ああ、一夏くんに一樹。まだ教室にいたんですね。よかったです」「はい？」

声のした方に顔を向けると、書類を抱えた山田先生がいた。どうしたんだ？

「えつとですね、量の部屋が決まりました」

そう言っって部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

この学校はとある理由から全寮制なのだ。その理由とはIS操縦者の保護だ。学生のころから勧誘しようとする国がいてもおかしくないからな。

「俺たちの部屋、決まってるじゃないんじやなかったですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……お二人は、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

聞いてない。が、何となくわかる。

俺たち二人は前例がない『男のIS操縦者』だから、国としても保護+監視がしたいようだ。

あの報道が流れてからいろんな奴らが家に来たからな。

果てには遺伝子工学研究所の人間まで来たな。誰がモルモットになるか。

「そう言うわけで、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいですが、一ヶ月もすればお二人専用のお部屋が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

……まさか、こいつと同じ部屋になるのか？ それは勘弁してほしい。

いや、マジで。

というかこの先生、いつまでこんなに近づいて話してるんだ？ クラス内外の人間はこの光景にかなり興味津々のようだ。

「で、部屋は分かったんですけど、荷物はどうすりゃいいんですか？ 俺も一夏も荷物は家だし、今日は帰ってもいいっすかね？」

「あ、いえ、荷物ならー」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

俺の頭の中でターミネーターの曲が鳴り響いた。

ぴったしすぎる。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

よくねえよ。今度帰っていろいろと持ってくるか。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、お二人は今のところ使えません」

だろうな。

ここには女子しかいないんだから。

「え、何ですか？」

本当のバカがここにいた。予想を斜め上とはこのことだな。

「テメエは女子と入る気か？」

「あー……」

「い、いや、入りたくないです」

その返答もどうかと思うが。

絶対に勘違いが起きるぞ。

「ええっ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のような……」

ほれみる。勘違いされた。

今の先生の言葉が伝播したらしく、廊下では『婦女子談義』に花が咲いてやがるし。

「一夏君、男にしか興味がないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」

「中学時代の交友関係を洗って！ すぐにね！ 明後日までには裏

付けとつて!」

何かもう疲れた。

さっさと部屋に行くか。

「えーと、ここか。1025室だな」

「つてことは隣か」

「そうなのか?」

「ああ、1024室だ。たぶん、近くの方がいって纏められたんだろ」

「あー、そうかも」

そんなことしそうなもの、俺は一人しか思いつかないんだがな。
ま、んなことはどうでもいいか。

「じゃあな」

「ああ」

ん? 開いてる。つて、相部屋だって言ってたな。

もう中にいるのか。

部屋に入るとそいつはいた。

「あれ、一樹? どうしてここに?」

幼なじみの天草紬だ。

こいつと相部屋ね。姉さんが手を回してくれたとしか考えられない。
い。

となると一夏の方も、だいたい予想できる。

「今日から一ヶ月、この部屋なんだと」

「そ、そうなんだ」

「どうした？」

「な、なんでもないよ？」

何で疑問形なんだ？

「ならいいんだけどよ。あー……疲れた」

手前のベッドに後ろ向きに倒れ込む。このまま眠れそうだな。

あ、意識が……。

「一樹」

「ん……何だ？」

「大丈夫なの？ オルコットさんとの決闘」

「……大丈夫だろ」

「でも、オルコットさんは代表候補生なんだよ」

「だからお前が教えてくれんだろ？ 一週間あつたらなんとかなる」

何でそこまで言い切れるのかは、俺自身にもわからねえ。

あえて言うなら感覚だな。

「だから頼むぞ」「うん」

ヤバい、そろそろ限界。

「紬。飯まで寝るから、その時は起こしてくれ」

「りょーかい」

「こんな物か……」

その日の夜。

寮長室で仕事を終え眠ろうとした千冬だったが、

「誰だ、こんな時間に？」

鳴り響く携帯のディスプレイには、二人いる幼なじみのうちの一人の名前が。

「……何の……」

「久しぶりだね、千冬ちゃん。元気してた？　というか元気だよな？　千冬ちゃんが風邪を引いたとこ、ボクは見たこと無いもん」

（切ってやるうか）

「ダメだよ千冬ちゃん。切ったりしたら」

「何でだろうな。お前と束との電話は、いつも頭が痛くなる」

「心外だよ。まあ、そこが千冬ちゃんらしいんだけどね」

あははははは、と笑い言葉を続ける。

「でさあ、本題なんだけど。一樹君のIS、ボクの会社で用意しようか？」

「何だと？」

「というか政府からの要請で作るように頼まれたんだけどね。早く

ても一週間くらいはかかるんだけど……どうかな？」

「……」

それは思ってもないはなしだった。

兄である一夏のISは既に決まっているが、弟の一樹にはまだない。

「……いいのか？」

「構わないよ。だって一樹君のためだもん」

「いろいろと申請書が必要になる。明日には送るから待っている」

「了解　それじゃあまたね」

「ああ」

携帯を置き、千冬はため息をつく。

昔と変わっていない幼なじみとの電話で、披露が押し寄せてきていた。

（突然で無茶苦茶なのは同じか）

千冬はそう思いながら部屋を出た。申請書を用意するために。

入学式翌日の朝八時。

俺は紬と一年生寮の食堂に来ていた。

「……朝飯か」

一夏ならちゃんと食うだろうが、俺は朝からしっかり食うのは無理。

気持ち悪くなるんだよ。

一回だけ一夏に無理矢理食わされ、学校のトイレで吐いたことがある。

あれは俺の黒歴史だ。

「一樹、何にするの？」

「ブラックとトースト」

これ以上は無理。

ちなみに紬は和食セットなんだが、白飯が大盛。そっぴゃこいつ、昔から大食らいだったな。

「行くうか？」

「ああ」

食堂の中を見渡せば一夏と箒の姿も。

あそこでいいか。

「うっす」

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「……おはよう」

何か箒の奴怒ってないか？

この状況を見て、俺はとある結論に辿り着く。

この朴念仁がなにかしたのだろうと。

「だから箒……」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……」

「おい、箒」

「何だ？」

俺には反応するのか。一夏の奴は軽く納得してないようだけど。

「今のは無茶苦茶だろ」

「……」

そこはスルーかよ。

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「へ？」

「あ？」

織斑は二人いるからな、当たり前のごとく俺も一夏も返事をした。見ると、トレーを持った女子が三人。

「ああ、別にいいけど」

一夏が反応すると三人は三者三様の反応を、周囲からはざわめきが聞こえてきた。

俺は飯を食ってすぐ寝たから詳しくは知らんが、部屋に女子が詰めかけて来たらしい。

紬には迷惑をかけたな。

「うわ、一夏くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめにとるタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「それに比べて一樹くんは少ないね」

「私達と同じだ」

女子の一人の言うとおり、量はほとんど変わらない。

三人組のトレーにはメニューは違うが、飲み物一杯にパン一枚、おかず一皿（しかも少なめ）がある。

「俺は朝はこれでいいんだ。この三人みたいに食うと気持ち悪くなるんだよ」

「そうなんだ」

一度一夏にこう話したら燃費がいいだのと言われた。
俺は車か。

「……三人とも、私は先に行く」

「ん？ ああ。また後でな」

さっさと食って箸は行ってしまっ

「どうしたんだろう、箸ちゃん？」

「知らね。そのバカが何かしたんだろ」

「何でそうなるんだよ」

そうとしか考えられない、とは言わないでおくか。

「四人で仲がいいよね？」

「知り合いなの？」

「知り合いというか、幼なじみだし」

「うん。小学校の時からだよね」

瞬間、当たりがどよめいた。幼なじみがそんなに珍しいか？

「え、それじゃあー」

女子の一人が質問しようとしたところで、手を叩く音が響いた。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

姉さんの声がよく通る。

よし、さっさと食うぞ。一周五キロのグラウンドなんぞ走ってたまるか。

つか、あの人がいつ休んでるんだろうか？
ま、いいか。

授業はやっぱりわかんねえ。

休憩でそんなことを考えていると、あたりは女子でいっぱいになった。

本当にめんどくせえ。

「ねえねえ、一夏くんと一樹くんさあ！」

「はいはい、質問してもーん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

「いや、一度に訊かれてもー」

そこで俺と一夏は気がついた。紬の奴が有料で整理券を配ってることに

俺達で商売をしてんじゃねえよ。

ちなみに筈はこっちを黙って見てる。起こってるようにしか見えないんだよな。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの？」

「え。案外だらしなーーー」

パンツッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

ナイスタイミングの叩き。個人情報をばらすな、ってことだな。

「ところで二人とも、お前達のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから少し待て。織斑兄のは学園が、織斑弟のは天草重工が専用機を用意するようだ」

「????？」

天草重工って紬のとこだよな？ てことは暦さんが何かしたのか？

あの人ならやりそうだ。

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に!?!」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

そりゃ騒ぎにもなるか。

俺だって驚いてる。

「織斑兄、教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……」『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っております。またコアを取引することはアラスカ条約第七項な抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前達の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることとなった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

簡単に言えば専用機をやるからモルモットになれ。ってことだ。状況が状況なのはわかるけど、モルモット扱いはマジでやめてほしい。

まあでも、これであの女といい形でやり合えるわけだ。

ISが来るまでは一夏と『あれ』をやっとくか。

……放課後まで寝よ。周りが何か騒いでるが、睡眠欲には誰も勝てないのだ。

パンツッ！

「ぬおおっ」

「さて、授業をはじめろぞ。山田先生、号令」

イテエ……。

時間は飛んで放課後。
俺達は剣道場にいた。

俺と紬はギャラリィ。一夏とした筈は防具を付けて、ついさっきまで打ち合っていた。

そうさっきまで。

開始十分で一夏の一本負け。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

弱くはなっていないと思うぞ。俺がサンドバックにしてたから、回避に関しては一流のはずだ。

多分な。

なら何で負けたのか。それは一夏が攻撃に転じた瞬間を狙ったのだ。

これが小学校の時の一夏ならわからなかったと思う。

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

帰宅部つつても、家計のためにバイトしてたんだよな。

「……なあおす」

「はい？」

「鍛え直す！ IS以前の問題だ！」

それは違うと思うぞ。

「ていうかISのことをだな」

「だから、それ以前の問題だと言っている!」

「情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど

……悔しくないのか、一夏!」

「そりゃ、まあ……格好悪いとは思っけど」

「格好? 格好を気にすることが出来る立場か! それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいか?」

箒。それはダメだ。

「楽しいわけあるか!」

ほらキレた。

しょうがない。

「一樹?」

「ちと行ってくる。あれじゃ一夏のためにもならん」

俺が動き始めた時には、箒が防具を外した一夏に竹刀を振り下ろし、一夏はそれを受け止めていた。

たくっ……。

「止める、箒」

「何だ?」

おー、こええ。

「一夏の特訓は俺がやる。だから、お前はそのバカにISのことを教えてやれ」

「何だと？」

「だからそいつの特訓は俺がやるって言ってんだよ」

「私では役不足だというのか!？」

「んなこと言ってるねえだろうか。少しは話を聞け！　つか、そんなだと振り向いてほしい奴に振り向いてもらえないぞ」

と、耳元で呟いてやると箒は顔を真っ赤にした。

「おーおー。わかりやすい奴だ。」

「何を言っている貴様は！」

「それにお前がいなかった間の一夏のこと、いろいろと教えてやるからよ。それで手を打て」

「……わ、分かった。一夏！　私がしっかりISのことを教えてやる！　いいな!？」

そう言い放って箒は一人、剣道場から出て行った。

「お前、箒に何言っただ？」

「さあな。んなことより、箒に変わって俺が特訓相手だ」

一夏の顔色が見る見る真っ青になっていく。

どうしたんだろうなあ？　くくくく。

「つーわけで、今から組み手だ。いいな？」

「いや、それは……」

「問答無用だ」

「つ、紬！　助け……」

「ゴメン、無理」

俺は一夏の首根っこを掴んで剣道場の外へと向かった。

おと今日も毎日すごってますか。

第四話（前書き）

ISでの戦闘って、かなり難しいですね。
そんなわけで結構書き直してこれですが……もっと精進していきます。

それでは始めます。

本編の中で出てくる言葉についてです。

ガントレット＝籠手

アーマー＝具足

一応調べたので間違いはないと思います。

第四話

「来ないな」

「来ねえな」

あれから一週間の当日。まだ俺達のISは届いてない。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

俺達四人は沈黙。

「い、一夏くん一樹くん一夏くん一樹くん一夏くん一樹くん一夏くん一樹くん！」

第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってくる山田先生。

俺達の名前を繰り返してよく噛まないと思う。

「山田先生。落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す……は……、す……は……」

「はい、そこで止める！」

「うっ」

ノリで言ったらマジでやったよ。

しばらく何も言わないで黙ってみよう。

「……………」

「……ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

もうちょいやっててほしかった。完璧酸欠になるまで。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

ゴッ！ もっと優しくしてほしい。そうじゃないと反抗期がまたやってくるぞ。

「千冬姉……」

「姉さん……」

パンツッ！ パンツッ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなければ死ぬ」

今の本当に教師の言葉かよ。

「そ、そ、それですねっ！ 来ました！ お二人の専用IS！」

やっと来たか。

「二人とも、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

は？

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」「一樹ならこんな壁、ぶち壊しちゃうよね」

どづいことだ？

「「「早く!」」」

山田先生、姉さん、篝、紬の声が重なった。
鈍い音がして、ピットの搬入口が開いていく。

「「「そこに、『白』と『黒』がいた

俺は『白』よりも『黒』に目がいった。

黒。真つ黒。全部を飲み込んでいくような漆黒を纏ったISが、
そこに立っていた。

「左側が一夏くんの専用IS『白式』、そして右側が一樹くんの専
用IS『黒王』です!」

『黒王』。何て言ったらわかんねえけど、そいつは俺を待ってい
るような気がした。

そして俺もこの時を魔つてた気がする。

「体を動かせ。すぐにそうちやくしろ。時間がないからフォーマッ
トとフィッティングは実戦でやれ。出来なければまけるだけだ。わ
かったな」

俺は漆黒のISに触れる。

何だこの馴染む感じ。すっげえいい。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステ

ムが最適化をする」

姉さんの言うとおりに体をISに預ける。
これがISか……。

「――戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――」

「ISのハイパーセンサーは間違いなく動いているな。一夏、一樹、気分は悪くないか？」

今の一言で姉さんが心配してくれていることがわかった。
だって俺達を名前で呼んだんだから。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「問題ねえよ、姉さん」

「そうか」

まずは俺からか……ボコボコにしてやるよ。

「一樹」

「んあ？」

「頑張つてね」

「当たり前だ。行ってくる」

ゲートが開き、アリーナに向かう。

「あら、逃げずに来ましたのね」

このバカは一体何を言ってるんだらうな。

「逃げるか。俺の目の前で一夏をバカにした野郎を殴れるんだからな！」

「そうですか。ならーーー」

「ピーチクパーチクうるせえよ！」

女の言葉を遮って叫ぶと、俺の体はいつもの喧嘩の時のように動いていた。

つまり構えていない女に、手加減無しに殴りかかっていた。顔面に向かって。

「らあっ！」

試合開始の鐘はなっているから反則でも何でも無い。

隙だらけだった女は防ぐことも出来ず殴り飛ばされた。

「喋ってる暇があったら、戦う準備でもしたらどうだ？俺は一週間も待ったんだ。兄貴をバカにしたためえを、この手でボコボコに出来るこの瞬間をよお！」

今の俺が女やこの決闘を見ている生徒共に、どう移っているのかはつきり分からねえ。けど、昔姉さんに言われたことがある。喧嘩をしている時の俺はまるで野生の獣だと。

まあ、そんなのかもな。喧嘩してるときの俺は本能でしか動いてねえし。

「それはこっちのセリフです」

「がつ!？」

肩に走る激痛。

前からではなく後ろからの攻撃だった。

振り向けば何かが浮いていた。

あれか……。

「いいねえ……やっぱりこうじゃねえとな!」

開戦から二十分。

俺の方が劣勢に陥っていた。

まあ当たり前か。あつちは中距離用の装備に対して、俺は近距離用の装備。

このままじゃ俺の負け。なんだけど、俺には秘策がある。それで懐に潜り込めれば、俺の勝ちは確定だ。

「初見でここまで耐えたのはあなたが初めてですわね。褒めて差し上げますわ」

「そうかい」

褒められても嬉しくないってすごいな。

俺が見ているのは女じゃなく、空を飛び回るビット兵器。

あればかり見るとレーザーライフルで狙われるが、見ていないとやられる。

めんどくさいな。

あれ使うか。

袖が俺と一夏に覚えておいて損はないと教えてくれた『瞬時加速』を。

この一週間、ISに触ってないから一度も練習してないけど、理屈さえ分かってくれば何とかなる。

確か理屈はこうだったな。後部スラスタ翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する、だったな。

あー、ややこしいのは面倒だからこうだな。

まあ圧縮したエネルギーを使って爆発的な加速するって、ところだな。

「つーわけで、行くぜ！」

初の『瞬時加速』は、

「らあっ！」

成功。

一機目を握りした。

「なっ!?!」

女としては俺がこんなことをするのは、完全に予想外だったみたいだな。

次に狙うのは二機目のビット兵器。

「第二ラウンド、始めるぞ」

「本当に成功させちゃった……」

一樹が『瞬時加速』を成功させた瞬間、紬はそう呟いていた。彼女自身も、一樹が本当に成功させるとは思ってもなかったのだろう。

「天草。織斑弟にあれを教えたのはお前か？」

「あ、はい。でもISを使って見せたわけじゃなくて、私は理論を教えただけです。だから実践で使うのはこれが初めてだと思います……多分」

理論を教えただけで成功させた。

それはある意味信じがたいことであつた。とくに彼女、山田真耶は。

「初めてで成功って……」

「私も弟でなかったら驚いていたな。だが、あいつはそれくらいやつてのける。そもそもあいつのことだ。IS自体、感覚だけで動かしてるだろうな」

千冬の言葉に一夏も黙つたまま頷いている。

「本当に初心者、なんですよね？」

彼女がそう聞くのも無理もない。『瞬時加速』を使うようになってから、一樹の方が押し始めていた。セシリアのビット兵器『ブルー・ティアーズ』も、存在しているのは残り一つとなっている。

「間違いなくな。だが、この模擬戦は間違いなくオルコットが負ける」

「えっ!？」

「奴は喧嘩だと誰にも負けん。私も剣術や剣道などでは負けることはないが、型にはまらない喧嘩なら負ける」

「そ、そうなんですか……でも、その話がどう関係してくるんです？」

「つまり奴はこの決闘を『喧嘩』という認識で戦ってる」

このISでの決闘は、武器を使って相手のシールドエネルギーを0にすれば勝ち、というもの。

一樹からすれば喧嘩と変わらないのだ。

「一夏！」

「どこに行く気だ？」

「一樹を止める。じゃないとー！ー」

「不可能だ。おそらく『瞬時加速』を使用した時点で、あいつの中のスイッチは半分入っている」

そんなことは一夏に分かっていた。そしてスイッチが入ってしまったような状況になってしまった理由も。

モニターに移る一樹は、最後のビットを握りつぶそうとしていた。

(一樹……)

「これでラストオ！」

最後のビットを握り潰して、あいつはやっと丸裸になった。

「さて、そろそろ終わりにするか！」

方向を変えて再び『瞬時加速』。一気に女に近づいていく。

「らあっ！」

こいつがライフルを引くよりも、俺の拳が早い。

このまま殴り続ければ俺の勝ちだ！

「————かかりましたわ」

その言葉に俺は本能的な危機を感じ、スラスターの向きを変更。

『瞬時加速』を使って離脱しようとしたが、間に合わなかった。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

ビームじゃねえ、ミサイルだ！

そう思った瞬間、俺は爆発に包まれた。

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを
押してください。

……このボタンを押したらいいんだな？

よく分からないままそのボタンを押す。

整理されていく情報。そして『黒王』は俺の物になった。

何となくそれが理解できた。

「ま、まさか……一次移行！？ あ、あなた、今まで初期設定だけ
の機体で戦っていたって言うの！？」

——近接特化ガンレット・《フェンリル》、近接特化アーマー・

《ガルム》。

「ようやくだ。ようやく本当の意味の俺のISで、兄貴をバカにした奴を叩き落とせる！」

ダメージは一次移行した時点で全回復。俺は目を見開いて、女だけを見る。

「ひっ」

何に脅えているか知らねえが、お前は終わりだ！

俺は今まで一樹をバカにした奴を、一度も逃がしたことはねえんだからな！

「テメエの意識がある内に教えておいてやる！俺は一夏を侮辱する奴は、誰だろうと絶対に許さねえ！」

『瞬時加速』でもう一度近づいて、全力でぶん殴る。ミサイルで攻撃されてるが関係ない。

左手で女の右手を掴み俺から離れないようにして、また殴る。まだ殴る。もっと殴る。さらに殴る。

腹を、胸を、肩を、腕を殴り続ける。

「潰れるお！」

「っ！」

拳が女の顔面を捉えようとした瞬間、

『ダメエっ！』

『一樹！ それ以上は止める！』

聞こえてきた紬と一夏の声。一気にスッキリしていく頭の中。女の身体を包む青いISはボロボロ。女自身もかなりダメージがあった。

『試合終了。勝者――織斑一樹』

試合終了を告げるブザーと共に、姉さんの声アリーナに響いた。

「馬鹿者が」

いつも以上の威力の拳骨が俺の脳天に突き刺さった。

「いてえ！」

「一つ聞く。どこでスイッチが入った？」

スイッチは……、

「多分一次移行が終わった瞬間だと……俺のISで一夏をバカにした奴を殴れると思ったら、そこから記憶が曖昧で……」

だから俺への攻撃が止まったタイミングなんて、全く分からないんだよ。

「……そうか、分かった。織斑兄。本来ならこのままお前とオルコットの試合をする予定だったが、明日に持ち越した。この馬鹿のおかげで、オルコット自身だけでなく、ISのダメージも大きいからな。異論はないな」

「はい」

「私はそれをオルコットに伝えてくる。今日は解散」

そう言い残して姉さんは出て行った。

…… ホント疲れた。さつさと帰って寝よう。

「一夏」

「どうした篤？」

「一樹はあんな性格だったか？ 小学生のころから喧嘩っ早いところがあったのは知っているが」

「ああ、あれは……問題があつてな。だから説明しにくいんだ」

「そうか。なら、今は聞かないことにする」

「そうしてくれるとありがたい。じゃ、俺達も戻ろうか」

「そうだな」

「納得がいきません！ 私はまだ負けていませんわ！」

強制的に負けとされ、次の模擬戦は明日だと説明されたセシリアは、その説明に来た千冬に噛みついていった。

「そうか。ならお前は織斑弟に勝てるのか？ あいつはあのまま殴り続けていたぞ」

「それは……」

殴られ始め、三発目でセシリアの頭の中は痛みで支配されていた。そんな状態でISを操作できるはずがない。

「そういうことだ。あいつと戦いたいのなら、また別の機会にする
といい」

「ですが!?!」

「くどいぞ、小娘」

「っ!」

「以上だ。お前も明日に備えてもう休め」

「分かり、ましたわ」

千冬がいる手前そう言うしかなかったが、割り切ることが出来な
い。
時間がたつていくにつれてこの憤りは、徐々におおきくなってい
く。

「織斑一樹……」

「呼んだか?」

「なっ!?!」

その声の主、織斑一樹は音もなくそこにいた。

第五話（前書き）

ただ今すごい悩みがあります。

それは一樹の周りを固めるヒロインズを誰にしようかと。二人はまあ、決まっているんですが……あと一人、一樹側にと考えているんです。

と、前書きはここまで。それでは第五話、始まります。

第五話

「な、何であなたがここにいますの!？」

「ん？ お前に話があるから、わざわざ来たんだよ」

「話？」

「ああ。模擬戦、もう一回やらねえか？」

「は？」

一樹のとんでもない提案に、頭が追いつかないセシリア・オルコットであった。

次の日の放課後。

現在、一夏対女の戦闘が行われている。と言っても一夏の負けはかなり近い。

「あの馬鹿(者)が。浮かれてるな」

俺と姉さんの声が被る。

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
「へえええ……。さすがご兄弟ですね！。そんな細かいことまで分かるなんて」

お、山田先生が姉さんをイジリ始めた。何となく予想は出来てるけどな。

「一樹もよく分かったね」

「そりゃあ今まで何度も見てきて、何度も直すように言ってきたからな。気づかないわけないだろ」

「確かに……」

結局直すことなく今日に居たつたわけだ。

「さて……あのこと、どうするかな？」

「ん？」

「いや、何でも……」

「織斑弟」

隣にいた紬にさえ聞こえないように呟いたつもりだったんだけどな。

たまに思う。この人、人間の皮を被った何かじゃないかって。

「ちょっと来い」

「……分かった」

ゴッ。

「敬語を使い」

「はい」

連れてこられたのはピットの外。壁の向こうには紬達がいる。まあ聞こえるわけがないけど。

「それで、あのことは何だ？」
「……俺も昨日のは、まだ納得してない」
「何だと？」
「あんな決着、納得するわけないだろ。それはあの女もだ」
「……そうか。で、何が言いたい？」
「もう一回あいつと戦わせろ」
「ダメだ」

即答だった。

「何でだ？」
「またスイッチが入ったらどうする？　今回、お前はオルコットを殴り殺す勢いで殴っていたんだぞ」
「……次はならない。絶対にだ」
「なぜそう言い切ることが出来る？」
「次の決闘はただ決着を付けたいだけだからだ。一夏は関係ないからスイッチは、喧嘩の部分しか入らないだろ」

そろそろ姉さんに、俺のスイッチのこと言わないとな。

「喧嘩の部分、だと？」
「俺のスイッチは二個ある。喧嘩用と、一夏のためのスイッチだ。あの時は両方のスイッチが、特に一夏用のスイッチが強く入ったからああなっただけだ。喧嘩だけだと、あそこまでならねえよ」
「……」

今の話を聞いて黙ったままの姉さん。まあ、信じるのは難しいよな。

でも信じてもらわないと、模擬戦は多分出来ない。
後回しにするよりも、俺はさっさと決着を付けたい。

「頼む」

「……分かった。だが、条件がある」

「条件？」

「そうだ。もしお前が昨日のようなことになれば、強制的に試合は終わり。今度はオルコットを勝者とする。この条件が飲めないのであれば、模擬戦はやらせない」

ホントこの人は。やさしいんだか、やさしくないんだか。めんどくさい性格してるな。

「分かった」

「なら準備を始める。お前とオルコットの戦闘はこの後だ」

「つて、どこ行くんだよ？」

「お前のおかげでやらなければならぬことが出来たからな。それを終わらせてくる。それと教師には敬語を使え。いいな？」

そう言っつて姉さんは歩いていった。

サンキュー、姉さん。

一夏対女の結果は一夏の負け。惜しいところまで行ったの間違いないけど、ギリギリの所で自爆しやがった。

いつも思っつけど、どこか詰めが甘いよな。

で俺はと言っつと、

「ルールは一応聞いてるな？」

「ええ。強制的に私の勝ちになる可能性があるというのは納得できませんが……」

「問題ねえ。ちゃんと決着をつける。強制的に勝者なんぞ決めてた

まるか」

黒王を纏い、再びアリーナで女と相対していた。

「つーわけで、始めるぞ！」

試合開始の鐘は少し前に鳴っている。だが、俺達にとってはこれが試合開始の鐘だった。

「はあっ！」

先手必勝。それが俺のモットー！。

『瞬時加速』で雨よりも早く動いていた俺は、拳を振り上げ殴る準備は万端。後は近づいて、それを振り下ろすだけ。だったんだが、スラスターの向きを変えて真横に移動した。

直後駆け抜ける光。後一瞬でも遅かったら、まともに直撃していたのは間違いない。

「よく交わりましたわね」

射程内に入る前にビームライフルをコールしたらしい。

あぶねー。

「何となく危ない気がしてな」

今のは完全に野生の勘。アラートがなる前に体が動いて、無意識にやったことだ。

次もやれといわれて同じことは出来ねえ。

今のやり取りの間に配置したんだろう。俺を囲むようにビットが浮いている。

俺が動けば、それと同時に発射されるんだろうな。だけどこいつ、

忘れてないか。俺が『瞬時加速』を使えることを。

「させません！」

「ぐあっ！」

背中に走る激痛。

こいつ、今スラスターの動き撃つたのか？ そうなんだとしたら

……おもしれえ！

頭の中でカチツ、って音が聞こえた気がした。

「行くぜ、セシリア・オルコットお！」

俺は後ろ向きに『瞬時加速』。その先にビットがあるのは分かっている。

目の前じゃあいろんな音が鳴っていて、かなりうるせえ。シールドエネルギーも減り続けているし。

だが関係ない。

『瞬時加速』をいったん止めて、もう一度加速。俺が向かうのは、俺から最も遠いビット。

いつも俺から一番離れているビットの動きだけが遅いのを、何となく気がついていた。それは今でも同じ。

だから、

「捕まえたっ！　そして……うおらあぁ！」

女に向かって全力投球！　自分自身の装備が攻撃に使われるのは、完全に予想外だったんだろ。あいつは啞然としているし、ビットも動きを止めている。

ならもう一つだ。

次は一番近くにあったそれを掴んで、同じように投げつけた。

一度目は直撃だったが、二度目は避けられた。まあそうだろうな。今みたいなのは、一回だけだから成功する。猫騙しみたいなもんだ。

だけど陣形は完全に崩れた。攻めるなら今のはず。あいつの懐に飛び込むことが出来るのは、多分今が最大のチャンス。ここで決めてやる。

「うおおお!!」

『瞬時加速』で懐まで潜り込んだ俺は、女の腹に一撃。

「かはっ……………」

ここまで来て俺は大事なことを一つ思い出した。

こいつのビットは後二つある！ しかもビームじゃなくてミサイルの。

「今です！」

放たれるミサイルと同時に、俺は手を伸ばしていた。直撃したけど関係ない！

「離さねえぞ！ 今離れたら、もう近づけないかもしれないからな！ だから落ちろ！」

「それはあなたですわ！」

殴り続ける俺と、ミサイルを撃ち続ける女。

シールドエネルギーはすごい勢いで減っていく。女の方もそうだろう。

もう何十回殴ったか分からない。女のほうはミサイルは切れたらしく、ちよつと前からビームだけになっている。

「おらあっー！」

今の一撃でうつかり手を離して、女を殴り飛ばしてしまった。

本気でヤバイ。エネルギーはもう無いから、『瞬時加速』に回す余分は無い。

……あり？ あれの理屈って、スラスターから放出したエネルギーを取り込んで、圧縮したエネルギーで加速するんだったよな。じやあ、スラスターから出したエネルギーじゃなくても……たぶん出来る。

チャンスは一回しかないけど、絶対に成功させてやる。動きを止めてそのタイミングを待つ。

ー警告。後方よりロックオンされました。

来た！

ビームが発射された、独特の高い音が聞こえた。

行くぞ、黒王！

「ぐっ……」

背中には重い衝撃。だがシールドエネルギーは減らない。

「おおおおお！」

ビームのエネルギーを取り込んで、圧縮して加速！
すげえな俺。成功させちまった。

「これで……」

一発目。下から打ち上げるように殴った。

「がっ」

女の体は浮き上がる。

二発目は蹴り。更に女の体を打ち上げる。俺はそれを追いかけた。そしてトドメの一撃は、

「終わりだあ！」

踵落とし。

急降下していく女。その時俺は聞いた。

「終わりは……あなたです。織斑一樹」

俺にしか聞こえないような声で、あいつがそう呟いたのを。間違
いなくそう言った。

そして目の前にそれ、ビットが現れた。つまりそういうこと。
逃げることも許されず俺は打ち抜かれ、シールドエネルギーは0
となった。

そして試合終了の鐘が、アリーナに響き渡る。

『試合終了。勝者ーセシリア・オルコット』

「約束は守ったようだな」

そう言う姉さんは、何となくホッとしているように見える。
俺がいつ昨日みたいになるか不安だったんだろっな。

「当たり前だ。勝手に負けになるのはこまるしな。つか、俺が約束を守らなかつた時があつたか？」

「小学生のころの記憶しかないが、そこそこあつたと思うが……」

なあっ！

「そこそこつて言うか、かなりだよな」

ぐう！

「俺なんてまともに約束を守ってもらつたことないよな」

……………ブチン。

「一夏……死のうか？」

「何で俺だけ!？」

「考えりゃ分かるだろ」

視界の端で糸と箒が頷いているのが分かる。

喧嘩だけなら姉さんに勝てる俺と、まともにやり合つ気にはならないだろう。俺としても気が引けるし。

「つーわけで始めようか。お前が気絶するまでの、地獄の組み手を

……………」

「こ、断る!」

「断ることを断る! だから俺に殴られる!」

「嫌だ！」

「織斑弟」

「ん？」

「ほどほどにしておけよ」

一夏の味方がいなくなった瞬間であった。

「織斑先生の許可も出だし、行こうか」

「に」

「に？」

「逃げるが勝ち！」

全力でピットから逃げ出していく一夏。

逃がすわけがないだろうが！

「待てやあ！」

絶対にサンドバックにしてやる。

「ちっ……どこいきやがった、あの野郎」

一夏を追って寮の辺りまで来て、完全にあいつを見失った。
昔から逃げ足だけは早いからな。
しょうがない。他の方法であいつにお仕置きするか。

「さてどうやって……ん？」

「あは？」

いつの間にか女が目の前に立っていた。まあいてもおかしくはないか。すぐそこに寮があるんだし。

「……………」

「クラス代表おめつとさん」

「え？」

「だってそうだろ。一夏には勝ってるし、俺との試合も二回目はお前の勝ちだし」

「そう、でしたわね。ですが、それは辞退させていただきます」

「……………はあ？」

全く意味が分かんねえぞ。こいつクラス代表になりたいんじゃないのか？ というか、こいつがならなかったら俺が一夏が、クラス代表にならなくなっちゃう。

クラス代表になるのだけは絶対に回避したい。

「ですからあなたに……………」

「俺はならねえ」

「え？」

「そもそも俺は、あんなのになりたくて決闘を受けた訳じゃねえ」

「そうだったんですの？」

「ああ。あの時言っただろ。土下座させるって。あれが目的だ」
「……………」

何固まってるんだ、こいつは？

「ふふふ……………本当に面白い方ですね」

「何入ってるんだ？」

「何でもありませんわ。それよりも、あの時は失礼なことを言ってしまったって申し訳ありませんでした」

「……まあ、いいんじゃないね。一夏ももう気にしてないみてえだし、お前も気にしなくて言いと思うぞ……そっぴやお前、クラス代表を辞退するんだよね？」

「ええ。ですからこれから織斑先生に、その旨を伝えにいこうとしていましたの」

これ、あいつへの復讐に使える。俺も辞退すりゃ、クラス代表はあいつだ。

理由はまあ……適当に言えばいいだろ。

「くくく……女！俺も行く」

「え、それはどういう」

「俺も辞退すんだよ」

女の手を引っ張って、俺は校舎へ向かって走り出す。

「ち、ちょっと！待ってくださいまし！」

一夏あ！てめえがクラス代表になるのは確定事項だ！あーはっはっはっ！

第六話（前書き）

一巻の半分がようやく終わります。長かったような短かったような。

それでは第六話、始まります。

第六話

「一樹と一夏、どこに行っちゃったのかな？」

「二人とも、もう寮に帰ったのではないか？」

「そうならいいんだけど……何かこう、胸の辺りがざわつくっていうか、嫌な予感がすると言うつか……分かんないけど、一樹を見つけないといけないの！」

自分自身でもよく分からない衝動に駆られ、天草紬は幼なじみである織斑一樹を探していた。

ちなみに簞は紬に、一緒に探してほしいと頼まれ断りきれなかったため、今彼女といるわけである。

「あと探していないのって、どこだった？」

「職員室の辺りと寮だけだ」

「なら職員室だね！」

そう言っただけで職員室へ走り出す紬と、それについていく簞。しかしそれがこの後の大惨事を起こすことになるなど、誰も予想はしていなかった。

ここは職員室前の廊下。夕焼けでオレンジに染まっていて、かなり綺麗に見える。が、今の紬にとってはどうでもいいこと。

「いないな」

「そうだね。ここでもなかったかあ……」

ここにもいないことは何となく分かっていた。それでも淡い期待はあったので、少しは落ち込んでしまう。

そして次の搜索場所となる寮へ向かうため、来た道に戻ろうとした時だった。

「失礼しました」

聞き覚えのある、やる気無しの声が職員室の方から聞こえてきた。それは紬が探していた人物の声。

「いつーーーーっ!」

大声で呼ぼうと声を出した紬だったが、それ以上言葉は出なかった。

その原因は彼の後から出てきた彼女にある。

「失礼いたしました」

セシリア・オルコットである。

「へえ……」

「っ、紬？」

「何？」

その時、篝は紬に対し尋常じゃない恐怖を抱いた。

篝を見る彼女の顔に表情はなく、瞳にはさっきまでの光はない。目を逸らせない。逸らせてしまうと、自分はこの場で死んでしまっただけではないか。そんな錯覚を抱いていた。

「あははは……篝ちゃん、寮に帰ろうか？」

「あ、ああ……」

「準備しなきゃね。殺る準備を……」

「クスクスクス……」

「ぬおおおお！」

ただ今俺は、全力で舐から逃走中。捕まったら死は免れないのは確かだ。

言っておくが、俺はこいつに追われる理由に身に覚えはない。

俺、何かしたか？

ここまでにいる経緯を回想でお届けする！ というわけで回想モード、スタートオ！

「くくく……これであいつがクラス代表だ」

寮にエントランスで女と別れた俺は、入学して初めてなんじゃないかと思うくらいの上機嫌だった。

理由？ そんなの決まってるだろ。俺がクラス代表になる可能性が0になったからだ。

よかったよかった。あんな面倒な役職、なつてたまるかっての。

「一樹」

「お、筈か。どうした？」

「その……今、部屋に戻らない方がいい」

「はあ？」

突然こいつは何を言っただ？

「私は幼なじみを失いたくない。だから忠告しているんだ！」

「失うってー！ー」

「これは本気だぞ！」

「お、おう……」

箒は何かに怯えている。それが見て取れた。

俺に関係していて、しかも怯えている。まさかなあ。

「忠告したからな！」

何故だろう。本能が警報をならしている気がする。でも部屋には戻らないとな。

頭の中で警報が鳴り続けるが、俺は箒が去っていった方に歩き始めた。つか、部屋隣同士だし。

そして、

「ついに来たか……」

ここに立っていても始まらねえ。さっさとー！ー扉に手をかけて、俺は異常な寒気を感じた。

寒いのに何故だろう、汗が止まらない。背中汗でびっしょりです、はい。

何だろうか。ここにいたら死ぬ！ 体は勝手にバックステップしていた。

ドスッ。

さっきまで俺の頭があった場所を、銀色の光り輝く物が貫いた。

「ちっ、外したか……」

何だ、今の低い声は。あいつの声じゃなかったら。

「げっ」

そいつは扉を切り裂いて、部屋の中から出てきやがった。

「っ、紬……」

「遅かったね、一樹い」

白無垢に模造の日本刀を持った紬が、俺の目の前に立っていた。俺を見つめる瞳に光はない。

しかも紬の後ろには漆黒の何かと、般若の顔が見えた。

「な、何でそんな格好をなんでしょうか？」

「ん？ 分からない？」

分かっているけども、頭が理解することを拒否しています。

「一樹を斬るためだよ」

「斬られてたまるか！」

走りだそうとしたが、

「逃がさないよ」

一瞬で間を詰めて刀を振り抜かれた。狙いは俺の首。

しゃがむことでギリギリ避けると、歩いてきた方に走る。目的地は寮の入り口。

と、ここまでが俺が逃げることとなった経緯だ。

奇跡的に廊下には誰もいない。たまたまなのか、それとも紬の殺

気で出てこられないのか。どちらにしても、俺たち以外廊下にいないのは助かる。

『夜叉モード』。それが今の紬の状態だ。命名は俺。この状態になる条件は不明。

分かっていることはこの状態の紬の身体能力は異常で、俺は勝つたことはない。

「げっ……」

「知ってるよねえ、一樹い。逃げ切るのは不可能だつて」

後ろから追いかけてきていたはずの紬が、何故か俺の前にいた。こいつ、いつの間に。

チャキ。

「俺が何で斬られるのか、一切不明なんだけど」

「どうしてだろうね？ もう追いかけっこはいいよね。部屋に戻るうか？」

「拒否します！」

「無駄」

あれ何でだろ？ 紬に背を向けて走り始めたはずなのに、景色が変わらないぞ。

「離せ！ 俺は死にたくない！」

「何を言っているのかな？」

「いやあああああああ！」

次の日の朝。

何とか生き残ることができたが、体中はボロボロ。そこら中、包帯が巻かれていた。

「だ、大丈夫か、一樹？」

「大丈夫なわけあるか」

教室にいる俺は当たり前のように注目的。

そりゃ突然、包帯まみれの奴が教室に入ってくるんだからな。

「昨日、何したんだ？ 知ってそんな筈に聞いても、何かに怯えていて教えてくれないしさ」

「それは俺が聞きたい」

いくら聞いても紬は教えてくれないし。今日だって、一度も口を聞いていない。

逆に怒りたいけど、多分俺が悪いんだろう。多分。だから強く出ることができない。

そんなことを考えているとチャイムがなった。

「席に付……どうした、織斑弟？」

入ってきた姉さんも山田先生も、俺の姿に驚いていた。姉さんも驚くことあるんだな。

覚えておくことにしよう。

「階段から落ちました」

「そうか……」

嘘ってバレてるんだろうな。結構鋭いから。

「それではS H Rを始める。山田先生、お願いする」

「そついや今日発表だったな、クラス代表。

くくく。一夏、お前で決まりだあ！

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉しそうだし、女子たちも盛り上がってる。いいことをすると気持ちいいな。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは……」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

上機嫌に立ち上がる女。何がそんなに嬉しいんだ？

お前も一夏に復讐したくて辞退したのか？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

ギリギリだった奴がよく言う。

「それで、ああ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

したんだ。それで？

「“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS
操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠き
ませんもの」

「いやあ、セシリア分かってるね！」

「そうだよー。せつかくISが使える兄弟がいるんだし、お兄さ
んを持ち上げないと」

それには大いに賛成だ

「私たちは貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。
一粒で二度おいしいね」

いや、商売はするな。

と、ここで一夏が最後の抵抗を見せた。

「じゃあ一樹は！？ こいつだって負けたよな！？」

「そうだな。だが、お前は勝てるのか？ 私の見立てではお前以上
にISを扱えるぞ。それでこいつが勝って、辞退してしまえば結果
は今と変わらない」

「それは……」

「というわけだ。しかし、お前一人では厳しいこともあるかもしれ
ない。そこでだ、織斑兄。お前に補佐を一人決めさせてやるう」

……は？ この人、何て言った。一夏の補佐を、一夏本人に決め
させる？ 何てことをいいやがんだ！

「なら、一樹を補佐にする」

「俺は断固拒否する！」

そんなめんどくさい物なっただまりますか！

「お前に拒否権はない。クラス代表の権限でお前を選んだんだ。そんな物があるわけがないだろう」

「なっ!?!」

「というわけでクラス代表は織斑一夏。その補佐は織斑一樹だ。異存はないな」

クラス全員が揃って返事をする。

多分言い返しても、脅迫で有耶無耶にされんだろうな。

しょうがない。また一夏と、

「組み手だな」

今の眩きが聞こえたのか、俺の方を青ざめた顔で見えてきたがスル

！。
お前が俺を選ぶからいけないんだ。

そしてこれは余談だが、SHR後に俺は紬から謝罪された。

「ごめんね、一樹。昨日の勘違いだった」

直後、本気の殺意が湧いた。でも、それは収めることとなる。

「でもね、一樹も悪いんだよ。それ分かってるよねえ?」

「はい……」

「分かってないようだったら、ご先祖様とご対面するかもしれないから……」

脳裏を駆け巡る昨日の惨劇。何故だろう。目に汗が……。

「じゃ、後でね」

「ああ」

紬を怒らせないように、少なからずは努力しようと思った俺だっ
た。

怒ってた理由が分からないから、努力のしようもないんだけどな。

第七話

「ではこれよりISの飛行操縦を実践してもらおう」

四月下旬。眠気を押し殺して、俺は鬼教官の授業を真面目に受けていた。

ここで欠伸をしたら拳が飛んでくるんだろうな。

「織斑兄弟、オルコット、そして天草。試しに飛んでみせる」

訓練機を使った実習はまだ先で、今の所は俺達専用機持ちが手本となっている。

前々から気になってたんだけど、一クラスに専用機持ちが四人つて、パワーバランスおかしくねえか？

いつ他のクラスから苦情が来てもおかしくないと、俺は思うぞ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

熟練した操縦者と、ISを持って一ヶ月も満たない素人を比べられても困るんだが。

ISはフィッティングしたら、操縦者の体にアクセサリーの形状で待機してる。俺の場合は指輪だ。

「早くしろ」

へいへい。

俺は拳を突き出して集中する。色々試したけど、これが一番集中できるんだよな。

起きろ、黒王。

そこからは早かった。待機状態の黒王から溢れ出した光の粒子は俺の体を包み込んだ。そして再構築。一瞬で俺の体は黒王に包まれていた。

一夏はIS『白式』を女はIS『ブルー・ティアーズ』を。そして紬は朱いIS『朱天』を纏って浮いている。

この名前、絶対に暦さんが付けたよな。

「よし、飛べ」

紬とセシリアは急上昇。

俺と一夏も遅れて二人に続く。先に着いたのは俺。遅れて一夏も到着した。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の出力方が上だぞ」

厳しい言葉が一夏のみに向けられる。まあ俺たちにも聞こえてるんだけどな。

今やった急上昇と急下降。これは昨日教習ったばかりで、今日実践。なのに向けられたのは、お叱りの言葉。流石は鬼軍——。

「誰が鬼軍曹だ？」

「何のことでしょうか？」

いや、今のおかしいだろ。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ？」

「それ言い始めたらキリがねえよ。それとも、こいつらの誰かに—

から説明してもらおうか？」

「わたくしは説明しても構いませんが、長いですよ？ 反重力
翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

だろうな。俺も聞きたくはないし。

「それよりも一樹。お前はどどういうイメージでやってるんだ？」

逃げたな。面倒なことを聞いて来やがって。

で、イメージか。イメージ、ねえ……。

「特に何も。こんなもん感覚だ感覚」

「お前に聞いたのが間違いだった」

「お前も感覚でやってみるよ。案外、すんなり出来るかもしれねえ
ぞ」

「「そんなので成功するのは一樹だけだ（よ）」」

一樹と紬がハモる。

「確か模擬戦の時の『瞬時加速』も、感覚でやって成功したとか…
…いつものことなんですの」

「そうだよ。いつも感覚でやっちゃうから。だから一樹は例外だと
思っで。一夏が普通だから」

一夏の奴も頷いている。言わせておけば……。

この場で地上に叩き落としてやるうか。

「一夏さん」

「ん？」

「一夏さん、よろしければまた放課後にしどろしてさしあげますわ。そのときは二人きりでー」

「一夏っ！ いつまでそんな所にいる！ 早く降りてこい！」

とんでもない大声が通信回線から響く。声は箒の物。耳が痛いんで叫ぶのはやめていただきたい。

何でこれだけいて一夏ばかりが怒られてんだ？

「織斑兄弟、オルコット、天草、急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。ではお先に」

すぐさまセシリアは地上に向かう。

「うまいもんだなあ」

問題なく二つの課題は成功したらしい。

「そりゃ俺たちよりも長い間使ってたし、出来ねえとおかしいだろ」

「確かに……」

「次は私が行くね」

紬も女と同じように急下降を始める。完全停止も成功し、残るは俺たちだけとなった。

「……どっちからやる？」

「せっかくだから賭けねえか？ 十センチより遠かった方が飯を奢る」

「いいぜ。負けないからな！」

「失敗して墜落でもってしてろ」

二人同時に地面に向けて動き出す。

ギョーンツーーーーーズドオオンツ！！

俺の隣を何かが通り過ぎた。

「は？」

一気に俺を追い抜いた一夏は、俺が言った通り墜落しやがった。俺、予知能力でもあんのかな？ ま、そんなことはないんだけど。

地表より数メートル低い位置で、一夏はぶっ倒れている。そして俺は十三センチで完全停止。

この賭け、俺の勝ちだな。さて何を奢ってもらおうか。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

こいつ、どんなイメージで急下降したんだ？ すげえ気になる。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

いや、篝さんや。あれは何を教えたんだ。

昨日の篝の説明はというと

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、と感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

と、俺も絀も唾然とする物だった。

あんな効果音だけの説明でいいなら、俺の説明でもできるんじゃないか？

「大体だな一夏、お前という奴は昔からー」

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

本当にあいつは、入学初日に絡んできた奴と同一人物か？ 完全に別人だろ。

隣にいる紬はあの様子を、かなり楽しそうに眺めている。

何が楽しいんだ？

「……ISを装備していて怪我などするわけないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISをそらびしていても、ですわ。常識でしょう？」

相手が姉さんや一夏なら、絶対に心配はしない。

姉さんは心配する必要があるのか聞きたくなるし、一夏の場合は心配することがもつたいない。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやっている」

言い争っている二人を押し退けて、姉さんは一夏の前に立つ。

「織斑兄、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

武装か。一夏が羨ましいな。

俺の武装はフェンリルとガルムで、しかも両手両足用。思い浮かべるのが面倒なんだよな。

「なあ紬。お前の武装って何なんだ？」

「長刀。かなり長いから慣れるまで時間がかかったけどね」

こいつに刀とか、もう何かダメだろう。またボコボコにされたりしてな……それは勘弁したい。

ま、ISが真っ白じゃなかっただけでもいいとしようか。そうじゃなかったら、俺は昨日のことを必ず思い出すことになってだろう。というか、今思い出した。ヤバい、体が震えてる。

「次、織斑弟と天草。展開してみる」

「了解」

「は、はい……」

これもイメージか……。あの決闘の日から一夏や紬たちと、ほぼ毎日のようにアリーナ借りて練習してる。だから自分の装備の形状は、完璧に頭の中に入ってる。

それを俺の体に装備する……。

俺の四肢に光が集まって、フェンリルとガルムが姿を現した。

「織斑弟、お前も遅い。0.5秒で出せるようになれ」

一秒以下で遅い……つか、あんたは何秒で出してたんだ？ それが一番気になる。

「へいへい」

「返事は『はい』だ」

「はい」

0.5秒か……それより早く展開出来るようにしてみるか。
気づけば姉さんは女に。いろいろと言われているけど、俺にはもう
関係ねえし。それよか今日の昼飯、何にするかな……。どうせ一夏
の奢りだし、いつもより高いものでも食うか。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

IS学園正面ゲート。そこにポストンバックを持った小柄な少女
がいた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから取り出したくしゃくしゃの紙。
それには地図は無く、書いてあるのは目的地の名前のみ。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

IS学園の敷地の大きさはかなりの物。ISを動かすためのアリ
ーナが何個もあるのだからしょうがないが、始めてきた人間には優
しくない作りになっている。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

文句も言いながらも彼女は歩き出す。
ちなみに彼女はなにも考えていない。何となく歩いていけば、勝
手に着くだろう的な考えである。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

キョロキョロと辺りを見て回るが、誰も見あたらない。

「だから……なんだよ……」

声が聞こえてきて視線をそちらにやると、夜で顔が見えないが女子がISの訓練施設から出てくる所だった。

（ちょうどいいや。場所聞こつと）

声をかけようと小走りしようとしたときだった。

「んなわけねえだろ。それであの女との決闘も何とかなってんだから」
「ら」

男の声が聞こえてきた。それも知っている人物の声。
この学園に行くことは知っていたが、初日に会えるとは思ってみなかった彼女は緊張していた。

（久しぶりだけど、あたしって分かるよね）

止めていた足を再び動かし始める。

「いつ……」

「一樹、いい加減に感覚でやるの止めたほうがいいよ」

「だからな、この感覚は今までの喧嘩の経験が元になってんだ。バカにしてつと、ヤバいことになるぞ」

「ヤバいことつて何？」

「……さあな。んなことよりも、先に戻って寝るわ」

「え、ちよつと、ご飯は？」

欠伸をしながら歩いていく男子を、女子と一緒に歩いていく。

(今のつて紬よね……あの子もここだったの。ていうか、先に戻ってるってどういうこと?)

彼女は自分の頭の中が、異常な速度で冷めていくのが分かった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」

事務員の言葉よりも、今彼女の頭を占めるのはさっきの出来事。それ以外のことはどうでもよかった。

「織斑一樹つて、何組ですか？」

「ああ、噂の兄弟の弟さんの方？ 一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。あの子のお兄さんがクラス代表になったみたいで、補佐は弟さんのらしいわよ」

事務員の話を見殺して鈴音は次の質問をする。

「二組のクラス代表つて、もう決まってますか？」

何故そんなことを聞くのだろうと思った事務員だったが、それにもちやんと答える。

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ ええと……聞いてどうするの？」

そこでようやく鈴音の様子がおかしいことに気がついた。

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってっ……」

額に血管マークを浮かべ笑顔で返す鈴音に、事務員の彼女は恐怖を感じた。

第八話

「というわけでっ！ 織斑一夏くんクラス代表決定おめでとう！」
「おめでと〜！」

ここは食堂。夕食後の自由時間で、一組のメンバーがここにいた。すっげえ帰りたいたいんだけど、強制参加なんだよな。この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

ん？ さっきから相づち打ってる女子、同じクラスにいたか？

というか、一組以外の生徒が絶対にいるよな。

ま、どうでもいいんだけど。

「ふああ……」

紬の奴もクラスの奴らとワイワイ騒いでる。俺はというと、少し離れて成り行きを見ている。

だって混ざって騒ぐと体力使うし、めんどくさいだろ。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑兄弟に特別インタビューをしてみました〜！」

何かめんどろそうな人が来たぞ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす」
第一印象はよく喋る人だ、ってことだ。

「一樹」

「んだよ？」

「一緒にーーー」

「嫌だ」

「まだ何も言っていないんだけど」

「混ざると体力使うから、ここから動きたくない。以上が理由だ」

「ダメ人間の理由だよな」

「うっせーよ。つか、俺はここから逃げる」

「帰るじゃなくて逃げる？ どういうこと？」

「あの人だよ。絶対にーーー」

「君が弟の織斑一樹くんだよな！」

この人だよ。

「新聞部副部長のーーー」

「黛薫子。名前は聞いてたから知ってますよ」

「そっか。双子なのに全然違うね。性格とか」

「二卵性だからっす」

初めて会う奴にはほぼ100%の確率で言われんだよな、これ。慣れたけど。

「ではでは本題に！ 話によるとクラス代表になる権利を辞退したって聞いたけど、その理由は？」

そんな権利あったのか。つか、なかったら辞退なんぞできねえよ

な。

ま、いいや。適当に答えとこ。

「あんなめんどくさい役職しなくなかったから。それだけっすよ」

一夏への復讐も理由の一つだけどな。

「うーん、何かもつといいコメントがほしいんだけど、ないかな？」
「ないっすね。適当にねっ造しといてください」

「そうだね、了解。じゃあ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」
「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

本当かよ。こういうこと好きそうに見えんだけど。

そろそろ帰りたいんだけど、これいつまで続くんだ？ マジで眠くなってきたんだけど。

「はいはい、とりあえず一夏さんとセシリアちゃんは並んで。それに一樹さんと、隠れ専用機持ちの紬ちゃんも来て。写真撮るから」
「わ、私も？」

この人、紬が専用機持ちだってよく知ってたな。ウチのクラスでもつい最近まで知らない奴いたのに。

「専用機持ちだからねー。適当にならんじゃって」

適当と言われたら俺は少し離れて立つ。気づけば隣には紬が。

一夏と俺の間には女が立ってやがる。ちらちらと一夏の野郎を見てるが、どうしたんだ？

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えてー」

「時間がかかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

これで女がゴネたら、ISの試合の時よろしくブン殴ってやる。

俺は男女平等がモットーだから、躊躇はないぜ。

「ん？」

気づけば紬が俺の手を繋いでいた。

「何だ？」

「何でもないけど、いいよね？」

若干頬を赤く染めながらそんなことを聞いてきた。

「ああ」

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

そんなの分かるわけがない。

「え？ えつと……2？」

いや、真面目に答えんなよ。

「ぶー、74・375でしたー」

その答えってありか？

シャッターが切られ、終わりだと立ち上がって気がついた。一組

全員が俺たちの周りにいた。
箒なんてちゃっかり一夏の隣にいるし。

「何で全員入ってるんだ？」

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアと紬だけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

何かよく分からんが、女は悔しそうな顔をしてやがる。ちなみに俺の隣にいる紬は上の空で、今の状況に気づいてないっぽい。

そんなこんなで、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いた。
疲れた……。

疲れた……。

「そんなに疲れたの？」

「当たり前だ……何でお前はそんなにピンピンしてんだ？　それが

一番気になる」

「私も疲れてるよ」

そうは見えないからスゴいんだよな。これが女子か。

「そっかい……」

紬が着替えるときの衣擦れの音、何とかなんねえかな。すっげえ気になる。

一夏もこの状況を味わってることだろう。

「一樹はさ……」

「ん？」

「IS学園に入れてよかった？」

「こいつは何を言ってるんだ？」

「まあな。お前にも再開出来たしな」

「そ、そっか」

「何でこいつはこんなに嬉しそうなんだ？ よく分からん。」

「おやすみ、一樹」

「あ、ああ」

「二人とも、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「教室に着くなりそんなことを言われたが、知るわけがない。
転校生、ねえ。」

「転校生？ 今の時期に？」

「まあ一夏の言う通りだ。まだ四月だし。」

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「中国」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

腰に手を当てたポーズで、そんなことを抜かしている。女、たぶんそれはないと思うぞ。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

「確かにそうだよな。でも中国かあ……どんな子なんだろう？」

何であいつの名前が出てくんのかね。まさか、転校生って……そんなことはないか。

「どうしたのだ、一夏？」

「いや、ちよつとな」

「もしかして転校生が気になってますの？」

「ああ、少しは」

その返答に二人は明らかに不機嫌になった。まあ、しょうがないか。

一夏の鈍感も凄いけどな。

「ぼーっとしてるけど、一樹も気になってるの？」

「気になるっていうか、中国と聞いてお前もよく知ってる奴を思い出した」

「？ ……あつ、むっ」

どうしたんだ、いきなり不機嫌になって。意味が分からん。ただ知り合いを思い出したただけだろうが。

「今のお前たちに女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！ そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実

実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ」

「一樹だって補佐なんだからね。一夏にもしものことがあったら、一樹が出るんだよ。だから、今日から訓練やるよ」

クラス対抗戦。読んで字のごとく、クラス代表同士のリーグマッチ。

ちなみにこれ、やる気を出させるために優勝商品がある。学食デザートの半年フリーパスだ。

「一夏くん、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

余裕ではないと思うぞ。入学してから数週間が経ったって言うても、ウチのクラス代表は多分全クラス中最弱の代表だから。

一夏も一夏で、「おう」とか返事してやがるし。本当に大丈夫か？

「……その情報、古いよ」

突然入り口の方から聞こえてきた声には、かなり聞き覚えがあった。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そこには小柄な女子が一人。何やってんだあいつは？ バカじゃねえの

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「はんつ。猫娘が、何格好付けてやがんだ？ 似合わねえことやってんじゃねえよ」

「んなつ……！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

本当に気持ち悪かった。寒気がしたぞ。

「おい」

「なによ！？」

あー、相手が悪かったな猫娘。

バシッ！

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さつと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません……」

完全にビビってんな、あいつ。いやそれは昔からか。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ！」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ！」

いい声で返事をして、鈴は帰って行く。俊敏なところは猫だな。やっぱり猫娘ってのは間違いない。

「っていうかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

「そうじゃなかったらここにいなえだろ」

「……んちゃんも」

「何か言ったか？」

「な、何でもないよ。じゃあ後でね」

どうしたんだ、あいつ？ 何かおかしかったような。気のせいかな？

ちなみに二回ほど痛そうなお音が聞こえたが、これは間違いなく現実。

何やってんだか。

午前の授業が終わり、今は昼休み。飯を食うため五人で食堂に向かっていた。

「お前のせいだ」

「あなたのせいですわ」

授業中に自分たちがぼーっとして出席簿で殴られたこと、全て一夏の責任にしている女子が二人いる。が、今は無視。そこに関しては一夏がどうにかするだろうしな。

「おい、紬」

「……」

返事はなし。完全に思考の海を漂っているらしい。

ゴソソ。

「「「紬さん！？」」」

壁に頭をぶつけてさするような動作は見せるが、やはりこっちに帰ってきていない。

しょうがない。食堂に着くまで、俺が操縦してやるか。他の生徒にぶつかるなんてことになっても困るし。

「紬、お前何にすんだ？」

「……うん」

食堂に着いてもこいつは上の空。だから飯も俺が買うことになった。

いつも何食べてた？ まあいいや。この日替わりランチで。

ちなみに俺は担々麺の激辛+。このは食堂のおばちゃん気分が変わる。

「待ってたわよ、一樹！」

漫画とかならドン、って効果音が付いてそうだな。

「どけ、猫娘。通行の邪魔だ」

「言われなくても、って誰が猫娘よ！」

そのツッコミ今更だろ。教室にいたときも猫娘って言った気がするぞ。

「つか、ラーメンのびるぞ」

「わ、分かってるわよ！ 大体、アンタを待ってたんでしようが！

何で早く来ないのよ！」

「知るか」

何でこいつのために早く来ないと行けないんだよ。バカだろ。

「久しぶりだねえ、鈴ちゃん」

ゾクリ。

突然息を吹き返した紬の一言は、一瞬で食堂の温度を下げた。
これ氷点下じゃないのか？

「やっぱりアンタもここだったのね、紬」

正に一触即発。

俺たち、まともに昼飯食えんのか？

「ふふふふ……」

「あははは……」

震える俺たち4人を蚊帳の外に、ヒートアップしていく二人だった。

お願いだから周りのことも考えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7520x/>

IS - 騎士と魔王 -

2011年12月1日01時52分発行